

徳島県

シニア災害ボランティア
シンポジウム開催報告

シニアが守る地域の防災とこれから

平成24年11月21日（水）、徳島県徳島市のシビックセンター4階ホールにおいて、徳島県並びに当協会が主催する「シニア災害ボランティアシンポジウム」が開催されました。フォーラムの冒頭、主催者を代表して、豊井泰雄 徳島県経営戦略部長が挨拶した後、伊藤道司 NPO法人ひょうご地域防災サポート隊理事長による基調講演が行われました。パネルディスカッションでは、基調講演に引き続き、伊藤道司氏がコーディネーターを務め、パネリストとして、日開野博氏、阪本真由美氏、澁谷良臣氏、佐和良佳氏の4名をお迎えしました。それぞれの視点から、これからのシニア災害ボランティアについてお話をいただき、シニア災害ボランティアとして、心がけておいたほうが良いことについてもアドバイスを頂き、終演となりました。

13・15・14・15

基調講演

シニアが守る！地域の防災

NPO法人ひょうご地域防災サポート隊理事長

伊藤道司

はじめに、NPO法人ひょうご地域防災

サポート隊の活動趣旨が紹介され、一番大切なことは、各地域での防災力だと話されました。次に、阪神・淡路大震災、並びに東日本大震災から学んだこと、そして徳島県で被害想定される南海トラフ地震への対策について説明されました。最後に「シニアと防災ボランティア」として、現状並びに今後についてお話をされ、講演が終了しました。

なお、概要については、次のとおりです。

（１）私たちの防災活動

- ・ ひょうご地域防災サポート隊の役割は、「守れいのちを！地域の防災」を合言葉に、地域の皆さんと一緒に「どうしたら災害を免れるか」ということをお話しして、一緒に考え、それをサポートしています。
- ・ 一番大事なことは、地域の皆さんの防災力を向上させていくということです。

（２）大震災などから学んだこと

- ・ 阪神・淡路大震災の教訓として、「自助・互助・共助」の3つの言葉があげられます。そこには、自らなんとかやっていこうという思いがあります。
- ・ 東日本大震災からの教訓として、地域それぞれで、ちょっとした対策でも助かるこ

とがたくさんある
と思います。

- ・ 震災以外にも平成23年度以降、豪雨災害が度々発生しています。その特徴として、過去を大きく上回る記録的な豪雨や被害発生までの時間が短く、初期期の行動が生死を決めること等があります。

（３）南海トラフ地震に備えて

- ・ 徳島県もかなり大きな地震と津波が来るという想定がされています。来るものは来る。従って、対策をとると必ず助かるものは助かるのだと思っております。

（４）シニアと防災ボランティア

- ・ 東日本大震災が発生した平成23年は、「ボランティア文化元年」と言われています。阪神・淡路大震災の結果を踏まえて、専門的なボランティアが増えていきます。
- ・ 兵庫県は、宮城県を担当し、市町も入れて108人の方が現職職員として派遣されています。自治体業務は誰もが出来る仕事ではなく、行政の業務に通じた人材が必要で、とりわけ、自治体職員OBの支援も必要であると思います。
- ・ 地元企業と住民とNPOと、そこへ行政





伊藤 道司
NPO法人ひょうご地域防災サポート隊 理事長

1965年大阪工業大学土木工学科卒業後、兵庫県土木部に奉職。1996年兵庫県企業庁淡路建設局長、1998年兵庫県土木部次長、2000年に兵庫県企業庁地域整備局長を歴任。2001年4月から2004年12月まで明石市助役。2006年1月にNPO法人ひょうご地域防災サポート隊を設立。



日開野 博
四国大学短期大学部人間健康科介護福祉専攻教授

地域福祉活動・ボランティア活動推進指導者として、徳島県下並びに中国・四国管内のボランティアの組織活動や福祉のまちづくり活動・地域福祉計画づくり・その他社協活動・地域福祉活動推進アドバイザーとして広く活動中。主な著書に『新しいソーシャルワーク』『地域福祉活動計画策定の手引』などがある。



阪本 真由美
ひょうご震災記念21世紀研究機構・人と防災未来センター主任研究員

京都大学大学院情報学研究科、博士後期課程を修了。情報学の博士号を取得。在エルサルバドル日本大使館専門調査員、国際協力機構JICAを経て、現職。専門は、防災、被災者支援、自治体間の広域連携、国際協力など。



澁谷 良臣
徳島県職員退職者会副会長

1963年徳島県庁に奉職。徳島県職員労働組合の執行委員長、徳島県労働者福祉協議会会長などを歴任。退職後、被災地支援、ボランティア活動、また登山など幅広い活動に精力的に取り組んでいる。



佐和 良佳
美馬市社会福祉協議会事務局長兼地域福祉支援課課長

1984年に旧脇町の社会福祉協議会に入職。以来、地域福祉、ボランティア、防災を主に事業推進。2005年3月の合併で美馬市社会福祉協議会となる。2009年度事務局長。2010年度組織改編により法人部門と介護部門の2局体制となり、2010年～2011年介護部門事務局長。2012年度より現職。

パネルディスカッション これからのシニア災害ボランティア

14
30
16
30

が入るといふ形で地域を守っていくことが非常に重要だと思っています。地域を守っていくことはコミュニティの力もつけていくということになると思います。

各パネリストの方々よりテーマに関する発表がありました。その発言については、次のとおりです。

(1) 日開野博（ひがいのひろし）氏

・シニア災害ボランティアといった時に「シニアで何ができるだろうか」ということです。学生とともに、仮設住宅における集会所へ伺ったら、若者と交じってシニアボランティアが大活躍していました。

・現地でのボランティアのマナーや心得について、しっかりと守っていく必要があると思います。

(2) 阪本真由美（さかもとまゆみ）氏

・今回の災害において、ベテランの方は、専門性が高く、今後どういうニーズが必要であるかをよくご存じであり、リタイヤ世代ということで現地に長い間、腰を落ち着けてずっと活動することができました。

・常日頃、地域にて自分たちの力で災害を乗り切るといふことを是非心がけてもらいたいと思います。

(3) 澁谷良臣（しぶやよしおみ）氏

・一個人として、東日本大震災に対する支援として、「私ができることは何なのだろう」ということを自分なりに問いかけ、「是非お手伝いができることがあればしたい」と思いました。

・行政に加わったものとして、まちづくりそのものが長いスパンが必要であり、災害に備えるために力を合わせて自分の故郷や家族を守らなければならないと強く思いました。

(4) 佐和良佳（さわよしあ）氏

・社協の目的は自主防災組織を作ることではなく、その先の日常的なつながりの部分としての、「いきいきサロン」であり、「見守り活動」すなわち小地域ネットワークの入口の一つとして考えています。

・地域のキーパーソンは、シニアの方たちだと思います。65歳から75歳という年齢の方たちの活躍は絶対必要で、その人々への期待といふのはすごく大きいものがあると思います。

●シニアボランティアとして心がけておいたほうがいいこと

パネルディスカッションの最後に、今後のシニア災害ボランティアの際、心がけておいたほうが良いこととして、次のような意見が出されました。

・現地に行くことで、現地のニーズを肌で見て、感じてほしいと思います。

・被災した行政の人を批判しないこと、他の災害とは比較しないこと、そして行政への支援というのも大切にしてほしいと思います。

・行政に携わった退職者のメンバーの人が、もつとこの被災に対する行動を是非していただけたらと思います。

・現地にて、「地元のやり方を優先しましょう」ということを掲げること、現地の方を大切に考えることが必要ではないかと思っています。

次号では、山形県（1月17日・18日）、千葉県（1月7日・8日）、和歌山県（2月17日）の開催報告をお届けします。